

## デュルケムの社会分業論

佐 藤 滋 正

### 1. はじめに

デュルケムは1893年に出版された『社会分業論』で、今日の社会の諸傾向は分業であると言っている<sup>1)</sup>。

「今日ではこの現象は、すべての人の目につくほどまでに一般化している。私たちの現代産業の諸傾向について、もはや幻想が抱かれることはない。それは、ますます強力なメカニズムに、力と資本との巨大な集合に、したがってまた極度の分業に向かっている。職業が無限に分離され専門化されていくのは、ただ単に工場の内部においてばかりでなく、各工場それ自体が他の諸工場を前提とする一専門業なのである。」(pp. 1~2)

デュルケムの眼前にあるのは、世紀末のヨーロッパで急速に巨大化する産業と市場である。大工業の出現によって、アトリエの労働に代わってマニュファクチュアの労働が優勢となり、人間の労働の機械的労働への置き換えが進行している。労働の細分化に対する労働者の反抗が頻繁になる。また各産業は一国やさらに全世界の消費者に向けて生産するようになり、地域的に限定されていた諸市場が単一市場へと融合していく。均衡を確保していた生産者と消費者の密着性は失われ、生産は抑制と規制を欠いた暗中模索過程となる。諸処で過剰生産と企業破産が発生し、労使対立が激化する。

「生産者はもはや市場の限界を心に描くことはできない。その結果、生産は抑制と規制とを欠く。生産は行き当たりばったりに模索する他なく、そして、この模索過程では、生産量があちこちで過剰になることは不可避である。経済的諸機能を周期的に混乱におとしいれる恐慌は、そこから生ずる。破産という地域的・限定的な恐慌の増加も、恐らくこの同じ原因の結果であろう。」(p. 362)

他方で、分業の進展は様々な病理学的な現象をももたらしている。ノルウェーを除く全ヨーロッパで、自殺者数がこの一世紀以来急増している。「自殺」は「自死」とは区別される。古代デンマーク人やケルト人の高齢の老人が自らその生命を絶つ自死は、仲間の者たちの穀つぶしになりたくないという理想に殉ずる自己放棄の行為である。これに代わって絶望的な自己破壊行為としての自殺が、いまや文明民族の「風土病的」様相を呈している。自殺率が、田舎より

都市、農民より自由業者、女性より男性、またスペイン・ポルトガル・ロシアよりドイツ・フランスにおいてそれぞれ高くなっていることは、自殺と文明の相関性を示唆するものである。「自殺は文明とともにのみ現れている」のであり、その文明を分業は推し進めてきたのである (p. 362)。

このような「分業」について、経済学者は概してポジティブに語ってきた。周知のように、アダム・スミスは18世紀のピン製造作業場を例に取って、分業の国富増大に及ぼす作用力の大きさを生き生きと描き出した。19世紀にチャールズ・バベッジは、職業の分割が労働コストの節約と製品の低廉化につながるという「経済的生産に関するバベッジの大原理」(A. マーシャル)を主張した。こうした一工場内の分業は世界的レベルに投映され、例えばアメリカの社会学者 H. C. ケアリーが以下の引用で語っているように、人類の富裕が社会的分業の進展を軸にして描き出されることにもなった。

「孤立した植民者の活動には持続性は存在しえない。彼は、その生活資料のためには自らの領有力に頼り、広大な地表を歩き回らねばならないから、しばしば食糧の欠如から死の危険に陥る。……けれども、時とともに富と人口とが発展し、この発展とともに、社会の活動において増加が現れてくる。その時以来、……一人は魚を、いま一人は肉を、第三番目の者は麦を供給し、他方、第四番目の者は羊毛を布にする……。一步ごとに私たちは、人間の側の力の増加と運動速度の増加をとともに確認するのである。」(p. 389)

このあまりにもバラ色の社会的分業観を、デュルケムは批判する。すでに述べた、部分労働化による人間の部品化と部分人間化、作業のルーティン化と職人の駆逐、労働モラルの衰退と生産性の低下といった、分業の弊害は歴然としている。しかしデュルケムは、現にそこに進行している社会的分業の発展が、問題解決の新しい可能性をも同時に叢生させているはずだ、とも考える。現下の分業の下で発現している矛盾対立は、それに見合う新しい社会組織が未だ発達していないことによるものであり、この新しい産業的生活そのものは否定されるべきではない、ととらえるのである。

「産業的生活のこれらの新しい諸条件は、自然的に新しい組織を求める。しかしこれらの諸変革は極度に速く成し遂げられているので、闘争する諸利益はまだ均衡する時をもちえないのである。」(p. 362)

この、社会的分業のネガティブな外観とその深層で進行しているポジティブな社会組織の潜勢的な形成という把握こそ、デュルケムの“社会分業論”を特徴づけるものである、とひとまず言うておこう。それは、労働の分割(分業)は同時に労働の結合(協働)であることを述べた経済学者たちとも一脈通じる面も有している。ただデュルケムのばあい、結合労働としての「新しい組織 *organisation nouvelle*」は、単に労働の生産性を高める効率性という観点からのみ眺められるのではなく、結合それ自体に社会的豊かさを見るという意味あいがいより強く押し出されている。それは、デュルケムが「富」を「心」の問題と結びつけ、「生きる *vivre*」こと

を強調していることと結びついている<sup>2)</sup>。

「経済学者たちにとっては、分業は本質的に一層多く生産するということに存している。私たちにとっては、このより大きな生産性は、単に分業という現象の必然的な一帰結、一残響にすぎない。もし私たちが専門化するならば、それはより多くを生産するためではなく、私たちに与えられた新たな生存諸条件の中で生きることができるためなのである。」(p. 259)

分業の進展は、物的富のための作業の効率的分割ではなく、社会組織を形成する社会的連帯の源泉なのでもある。次項で見ると、デュルケムが社会的分業の進展を「機械的連帯」から「有機的連帯」への必然的な発展過程としてとらえているのはそのためである。そのことは、諸個人の「心的生活 *vie psychique*」(p. 339)をも拡大させるだろう。しかも、分業が増進させる社会的諸機能の協力関係は、自ずとその拡大に見合う社会的調整機能をも拡張させ、固有の結合の諸規則の一体系を生成させていくだろう。そのことは、諸個人の「自由」への一定の様式での「規制」を意味するかも知れない。私的諸個人が交換において接触する市場のみに社会性を見いだす経済学的な社会＝個人観とは異なり、デュルケムは、社会的連帯を内面化した言わば社会的諸個人の生成についても語るのである。

「しかし、もし分業が連帯を生み出すのならば、それは単に分業が各個人を、経済学者たちが言うような交換者にするためばかりではない。分業が、人間たちの間に、彼ら相互を継続的に結びつける権利と義務の全き一体系を創造するためでもある。……経済学者たちは、分業は個人的で一時的な利益のみに影響を与えると信じてきた。したがって、闘争しあっている諸利益とそれらを均衡させるべき方法とを評価するためには、すなわち交換がおこなわれるべき諸条件を決定するためには、諸個人だけがその資格をもつ、ということになる。しかもこれらの諸利益は永久的な生成過程にあるから、どのような永続的規制もおこなわれる余地はないのである。しかしこのような概念は、どの点から見ても事実と適合しない。分業は諸個人を対峙させるのではなくて、社会的諸機能を対峙させるのである。」(pp. 402～3)

本稿は、社会的分業の進展のうちに社会的連帯と社会的諸個人の生成を見るデュルケムの“社会分業論”の論理を辿り、これを再構成することを通じて現代の“市場”社会への批判的省察への足掛かりを得ようとしたものである。

## 2. 機械的連帯と有機的連帯

まず、社会を構成する2つの「連帯」様式が区別される。「環節的連帯 *solidarité mécanique*」と「有機的連帯 *solidarité organique*」である。「機械的連帯」は無機物の結合に類似していて、個人的人格が集合的人格に単に飲み込まれているような連帯の様式である。個人を社会に結びつける連鎖は、事物を人に結びつける連鎖にまったく類似していて、個人の意識は集合類型の単なる付属物・従属物である。「社会」は、集団の全成員に共通な信念と感情との多少とも組織

化された一全体であり、諸個人の個々の運動には従わない (p. 100).

これに対して、「有機的連帯」は生物体の統一をつくり上げている結合力に類似していて、諸個人は専門的機能をもった相互に異なる固有の人格として活動することが前提されるような連帯の様式である。個人を社会に結びつける連帯は、各器官がその専門的特色と自立性をもった高等動物に観察される連帯に似ていて、各個人は自己の固有な活動範囲をもっている。「社会」は、相異なる諸個人の諸機能連関が体系化された構造であり、したがって集合意識が規制しえない個人意識を必須の前提としている (pp. 100~1).

「第一の連帯は、何らの媒介なしに直接に個人を社会に結びつける。第二の連帯においては、個人は社会を構成する諸部分に依存しているから社会に依存するのである。」 (p. 99)

見られるように、この2つの連帯は「個性 individualité」に作用する方向が正反対である。「個性」、あるいは自己と他人とを区別する各人の特徴から形成される人々の「人格 personnalité」は、一般に、共同性が個人の中に場所を占めることが少ないばあいのみ生起することができる。したがって類似に由来する第一の連帯においては、連帯は人格との逆比例においてのみ増大することができ、集団意識が私たちの「総意識」を覆いすべての点でまったく一致しているときにその最高限に達する。しかしこの時、私たちの個性はゼロなのである (pp. 99~100).

これに対して第二の連帯では、集団意識が個人意識の一部を開放したまま残しておくことが必須で、この保留部分が大きければ大きいほど連帯は強力になる。とはいえこの時、社会の活動領域が個性と反比例的に縮小するわけではない。実際、一方において、各個人は、労働が分割されればされるほど社会にますます密接に従属し、同時に他方において、各個人の活動は専門化されればされるほどますます個人的になるのである。社会は、個性が活動的になればなるほど同時に全体的にますます活動的になり、この面からすれば、個人の社会への依存はかえって強まるのである (p. 101).

個人の社会との結びつきは、第一の連帯においては直接的、第二の連帯においては間接的と言えるだろう。前者において生じていることは、個人の社会への依存ではなく、共同性の中への個性の消失なのである。後者においては、媒介的諸手段としての社会の比重が増大し、個人が社会に依存するとともに個性も拡大していくのである。

2つの連帯に対応して2つの社会類型が区別される。「環節的社会」と「有機的社会」である<sup>3)</sup>。それぞれ次のように特徴づけられる。

まず環節的社会においては、社会の根本的類似が社会的凝集の条件となっている。集団の全成員は、彼らが互いに類似しているから互いにひきつけられるのである。逆に言えば、社会は彼らがすべてこれらの「根本的類似」を表すことを切望している (p. 74)。だから未開社会の法律は、ほとんどが禁止的な刑法なのである (p. 44)。また、未開社会において、宗教が社会生活全般に浸透しているのもそのためである (p. 206)。集合類型が発展し個人類型が未熟な状

態にあつては、社会のあらゆる精神生活は宗教的特性を帯びざるをえないからである (p. 154). また未開社会では、政治的権威が最高度に達している。統制権の権威が最大となるのは、個人が集団のうちに吸収され、集合的人格以外には人格と名づけるものが存在せず、個人を首長に結びつける連鎖が物を人に結びつける連鎖と等しくなるときだからである (p. 52). またこの原始的社会群は、しばしば「共産主義 communisme」と特徴づけることができる。「所有は、個人が集団から遊離して、自ら有機体としてだけではなく社会生活の要因としても人格的で明確な一個の存在となるとき、はじめて個人的なものになることができる」にもかかわらず、そこでは個人的所有の概念が完全に欠落しているからである (p. 155).

それは、同質的な構成員の反復する氏族集合体が単純に接合して出来上がっているような社会の原型状態である (p. 149). アメリカやオーストラリアの未開の諸部族が想起されるだろう。部分社会は互いに類似しており、またそれぞれの部分社会の構成員の相貌も非常によく似ている (p. 152). 諸環節が類似しているため非常に大きな凝集力が発揮されるとともに、諸環節の同型性によって結合が解消される可能性も大きい社会である (p. 156). 腔腸動物の群体がイメージされる。諸環節が互いに類似し同質的に接合されている腔腸動物は、栄養摂取や生殖活動が共通におこなわれるために、結合状態にあるときは諸環節の全体への全面的依存性が明白に見て取れるとともに、他方、諸環節相互の分離も比較的容易であるような構造的特性を有しているからである (p. 150).

「諸部分は互いに区別されず、したがってそれら諸部分の間で適切に調整されるようなことのない、要するに確定的な形態も組織もまったく欠けた、絶対的に同質的な一個の集塊、がそれである。」 (p. 149)

他方、有機的社会においては、成員の類似でなく相違が社会的連帯の条件となる。諸成員は、相互に異なる専門的機能を果たす諸器官として機能的に結合される (p. 157). 諸機能が専門化すればするほど「集合的共同意識 conscience commune」は薄れていき (p. 97), したがって法律の比重は刑法から契約法のような「協同的法律 droit coopératif」に移る (p. 119). 禁止的・懲罰的な刑法は、集合的感情が強力であつてはじめて存在理由を有しうるからである (p. 76). 動物界の進化が神経系統の発達によって測られるのと同様に、有機的社会の統合の程度は協同的法律の発達によって測られうる (p. 98). また宗教の領域は、集合的表象の衰退とともに社会生活のますます小さな部分へと縮小していき、そのことは格言やことわざの減少にも照応している (pp. 143~4). 代わって、個人的人格が社会生活のより重要な要素となってくる。とはいえこのことは、個人と社会を対立させることを意味しない。すでに述べたように、社会は諸個人なしには無であるとしても、各個人は社会の創造者であるというよりも、むしろはるかに多く社会の産物だからである (p. 342).

「有機的社会」は、類似的・同質的諸環節の反復によってでなく、相異なる特殊的諸機能が確定的諸関係によって一体系に結合されているような社会である (p. 99). 社会の構成員は固有

の人格をもって相互に異なっていることが前提とされ、そして彼らが従事している社会的活動の特有性によって集団生活を形成するのである (p. 100). 各部分器官は、環形動物の環節のように直線的に隣接して並置されているのではなく、中心器官に向かって深く統合されるが、他方中心器官も諸部分器官を必須の前提としている。脊椎動物の身体がイメージされる (p. 157). 胃や腸などの諸器官は、中枢としての神経器官を取り巻いて同格的もしくは従属的に配列されているとはいえ、この神経器官自体が他の諸器官に依存してもいるのである。神経器官の言わば特権的優越性は、その役割に由来するのであって何らかの外部的な力によるものではない (p. 157).

「有機的連帯が優勢である社会は、類似的で同質的な諸環節の反復によってでなく、各々が専門的な役割をもち、差異化された諸部分からそれ自体が形成されているさまざまな諸器官の体系によって構成されている。その際、社会的諸要素は、同じ性質をもつものでないのと同時に、同じ方法で配列されているものでもない。それらは、環形動物の環節のように、直線的に並置されているのでもなければ、一方の中に他方がはめ込まれているのでもない。それらは、有機体の他の部分に調整作用を実行する同一の中心器官の周囲で、互いに協調したり従属したりするのである。この中心器官それ自体が、前の類型の社会のばあいとはもはや同じ性格をもたない。なぜならば、他の諸器官がその中心器官に依存するとともに、中心器官もまた他に依存するからである。……動物において、神経系統の他の系統に対する優勢は、より精選された養分を受け取ったり、他にさきがけてその役割を果たすという権利（そう言ってよければ）に帰着する。だが、他の諸系統が神経系統を必要とするように、後者もまた前者を必要とするのである。」 (pp. 157~8)

「環節的社会」と「有機的社会」という2つの社会類型を区別的に設定し、それを「機械的連帯」と「有機的連帯」という2つの連帯様式との相関関係に置くことによって、デュルケムは「社会」の発展方向を、連帯原理＝社会形成原理の変遷という論理基軸に沿ってとらえ返そうとしたと言えるだろう<sup>4)</sup>。

社会進化の階段を上っていくに従って「環節的社会」は消滅していく (p. 168). 「環節的社会」から「有機的社会」へのこの進展は必然的である。だが、「有機的社会」はその「絶対的な純粹状態」ではまだどこにも存在したことはない、ともデュルケムは言っている (p. 166). つまり次節で見るように、「有機的社会」と「環節的社会」との混在様態において、歴史的現在をとらえようとしているのである。今日の各国の首都が昔よりもいっそう大きな政府の活動力や芸術・文学・信用取引を集中させているにもかかわらず、様々な諸都市が大学都市・官庁都市・工場都市・商業都市・温泉都市・金利生活者都市などとしてますます専門化していき个性的になっていくように、集中化と専門化は、私たちの眼前で日々進行している現実だからである (pp. 164~5).



### 3. 歴史プロセスの重疊的把握

デュルケムは社会の歴史を、単に社会構造の目に見える交替としてでなく、人々の結合様式の推移としてとらえた。すなわち社会構造変動の背後に機械的連帯から有機的連帯への変遷を見るのだが、そのときこの2つの連帯に照応する連帯の様式、すなわち2つの「社会類型 types sociaux」もまた変遷すると言うのである。

「それゆえ、初めは単独の、あるいはほとんど単独のものであった機械的連帯が次第に地盤を失い、有機的連帯が次第に優位を占めるようになることは、歴史の一法則である。しかし人間が連帯する様式が変容するとき、社会の構造も変化せざるをえない。分子的親和力がもはや同じでなくなるとき、物体の形態は必然的に転形する。したがって上の命題が正確であるならば、これら二種類の連帯に照応する2つの社会類型が存在するはずである。」(p. 149)

例えば A. コントは、分業の進展に伴う諸機能の過度の専門化が社会的凝集力を衰退させる」と嘆いた。この意見にデュルケムは反対である。デュルケムは、分業が生み出す新しい連帯の様式の所在を、したがって分業の進展が必ずしも社会的凝集力の衰退を意味しないことを強調する (p. 356)。有機的連帯が存在するためには連帯し合う諸器官の体系が存在するだけでは十分でなく、これらの諸器官が協同する様式がある程度予め確定されていることが必要だろう。連帯の性質転換とともに容れ物としての連帯の諸様式もまた進化しているはずである。事実、分業とともに法律をはじめ、様々な社会的諸規則が出現してくるのが見られる。例えば、婚姻や養子縁組みは未開社会においてはほとんど当事者の合意だけで十分であったが、今日では教会や司法官が介入する複雑な法律上の行為になった (pp. 184~6)。

デュルケムは、機械的連帯と有機的連帯は一方の進歩が他方の退歩であるというように「逆比例で発展する」(p. 169) と言う。社会活動はある点で後退しても別の点では拡張するのであり、進化を消失と見誤らないためには、観察者は社会活動の本質的場を一種の「装置 appareil」として見つめなければならない、とも言う (p. 182)。行動と意識が活動する“場”としての歴史は、直線的に流れていくものでなく円環的に反復するものであり、現代は、相対立する諸傾向が重疊する重層的な“場”の構造に他ならないからである。

「子供が継承するのは、両親の老年や成年でなく両親自身の幼時である。それゆえ、もし来歴の軌跡を説明しようとするならば、継起する諸社会をその同一の生活時期だけで考察しなければならない。」(p. 146)

歴史のこのような重層的な見方は、もちろん 18 世紀哲学の回顧的夢想への回帰を目指すものではない。デュルケムの念頭にあるのは、利己主義を人類の出発点に置き、その発達とともに愛他主義も育ってきたという 19 世紀のダーウィン主義的な歴史観への批判である。ダーウィン主義者たちは、コントが現代社会における有機的連帯を見落とし慨嘆したのとはちょうど反対に、未開社会における機械的連帯を見失うことによって過去を悲調を帯びた色彩をもっ

て描き出している。現代は暗黒の過去からの進化の延長線上にあり、明るい未来への一ステップとしてのみとらえられている。

「私たちの後ろには失樂園はなく、私たちの過去には惜しむべき何ものもないということをはっきりと示すためには、過去は暗く組織的にけなさなければならないと信じられている。反対方向に向いたこの一派ほど非科学的な人々はいない。もしダーウィンの仮説が社会道徳に利用可能だとしても、その際には他の諸科学におけるよりも大きな留保と節度を伴ってのことだろう。」(p. 174)

こうして典型的な進歩史観である H. スпенサーの社会的進化理論が批判される。スเปนサーは、低級な社会から高級な社会への発展を「軍国主義 militarisme」から「産業主義 industrialisme」への推移ととらえる (p. 178)。「軍国主義」は、戦時におけるように全成員を絶対的に服従させる専制的な権威の下で、諸個人が集団の中に没入し吸収されている状態、と定義される。

「産業主義」は、諸個人がそれぞれ固有の利益を追求することによって産業的連帯にもとづく社会が自動的にもたらされる、と説明される (pp. 169~171)。それゆえ、「軍国主義の衰退と産業主義の興隆とともに、権威の作用範囲としての権力が減退し、自由な活動が増大し、それにしたがって、契約関係は一般的となり、ついに充分な産業的な型においては普遍的となる」(p. 178)、と語られる。文明とともに個人の地位が増大し集団の力が衰退していき、「軍国主義」の専制は自由な契約社会としての「産業主義」の中に消失していくと言うのである。徹底した個人主義的進歩史観である。

これに対してデュルケムは次のように批判する。原始社会を特徴づけているのは「同質状態」であって専制的強制ではない (p. 170)。また同質的な社会はスเปนサーが言うように「社会生活ゼロの状態」ではなく、そこには「同質性由来する一定の型」を認めることができる (p. 155)。原始的な人々にも、人々相互の関係を規制する「道徳 morale」は存在するのである (p. 140)。他方、文明社会において諸個人を結びつける社会的結合力が潜在していることも見落とされるべきではない。「あらゆる契約は、契約する当事者たちの背後に、結ばれた契約を尊重させるために干渉しようとして待ち構えている社会が存在していることを前提している」からである。そのばあい、「社会は、それ自体として社会的価値をもつ、法規に合致している契約にのみ、その義務的な力を及ぼす」のである (pp. 82~3)。

連帯についてのこのような定義によって、デュルケムは「社会」を設定したと言えるだろう。社会生活は個人的諸性質から生じるのではなく、逆に、個人的諸意識のうちに見いだされるほとんどすべてのものが社会から出てくると考えられる。例えば、親子相互の感情を決定しているものは親族関係の社会的組織であり、社会構造が違えば親子感情が異なることは自明であろう (p. 342)。したがって、初めに孤立した独立した諸個人を置き、次いでこれらの諸個人が協同するために関係に入り込み合うといった議論は、「無から有を生む」ものと言わねばならない



(p. 175). 個人から社会を引き出すことができないように、「協同 coopération」は「個性 individualités」からは生まれないのである (p. 263). 同様に、社会は道徳の必要条件であり、「道徳性 moralité」は一つの集団の連帯的狀態とともに変化するのである (p. 394).

「それゆえ、スペンサー氏とともに、社会生活を諸個人の性質の単なる合成物として示すようなことがあってはならない。むしろ反対に、諸個人の性質は社会生活の結果だからである。社会的事実、心理的事実の単なる発展ではない。……確かに、個人的意識のうちにないものは社会生活のうちにないということは、自明の真理である。ただし、個人意識のうちに存するもののほとんどすべては、社会からくる。……諸部分の形式を決定するのは、むしろ全体の形式である。社会は、それ自体によって立つ基礎を、すでに諸意識の中でつくられたものとして見いだすのではない。社会はそれらの基礎を自らでつくっているのだ。」(pp. 341~2)

社会は全体、個人は部分であり、社会形態の背後には社会的連帯があるのだ。そもそも、戦争が停止され平和がもたらされるばあいの意味について考えてみたらよい。単なる勝ち負けにもとづく戦争による決着を、自らの権利の一定の制限の甘受を含む平和による決着に置き換えるためには、人々が単に論理においてだけでなく「生活の実践」においても、このような権利制限に同意することが必要であったはずである。「戦争によって満たされている本能が、平和が満足させる本能より弱いことはない」はずであり、「この相互的制限は一致和合の精神においてのみ行われることができた」(p. 89)と考えられるからである。またスペンサーは、交感神経と迷走神経が発達した人体では内臓が脳の一元的支配に従うことはないというアナロジーによって、産業社会の非支配性を主張しているが、これに対してもデュルケムは、スペンサーは「情報の交換」をおこなう「伝導神経の機能」に言及するだけで「支配 domination」を実行する「神経節の機能」には少しも触れていないと述べて、スペンサーの「産業社会」論における、支配する「装置」への認識の欠落を指摘している (p. 196).

「功利主義者たちは、初めに孤立し独立した個人を想定し、次にこの個人は協同するためのみ関係に入り込むことができると想定している。なぜならば諸個人は、彼らをひき離している空虚な間隔を飛び越えて連合するための他の理由をもっていないからである。だが、このはなはだ広く流布している理論は、無から真の創造が出てくることを要請している。」(p. 263)

諸個人の間に設定された「空虚な間隔 intervalle vide」のお陰で、今日では「連合する s'associer」ためには「理由 raison」が必要となっているのである (p. 263). 「個人の自由」が「正義」であり「道徳」の基層を構成するとみなされ、「慈善」は装飾以上のものとは見られていない。「多くの人々は、無私の精神が公的生活に干渉でもすると居心地の悪い気持ちをもたずには見ていられないほどである」(p. 90). しかし、「人々が諸権利を相互に認め合い保障し合うためには、まず彼らが互いに愛し合うことが、彼らが何らかの理由で互いにそして彼らが一部を成している同一社会に密着することが、必要である」。「正義は慈善に満ち満ちている」はずなのである (pp. 90~1). 現代では、「個人が一種の宗教の対象となっていく」(p. 147)と

言われるのは本当である。

「個人」と「社会」を抽象的に対立させ、単に「自由」と「強制」の代名詞とのみとらえる社会認識に代わって、それらの実相が取り出されねばならない、とデュルケムは考える。すなわち、諸個人がその内に社会を潜めた言わば社会的個人である他ないことを確認し、そしてその土台の上に「分業論」を展開していくのである。

#### 4. 社会的分業の進展と社会的コントロールの展開

デュルケムにとって分業とは、単なる作業の分割ではありえない、またお互いに不足しているものを単に補い合う「相互主義 mutualisme」的なものでもない (p. 266)。「分業は社会的連帯のすぐれた源泉」(p. 396)であり、機械的連帯において「共通意識 conscience commune」が果たしていた役割を、有機的連帯においては「分業」が果たすのである (p. 148)。したがって、「分業は環節的構造が消滅するに従って規則的に発展する」(p. 237)のものであるとはいえ、分業の効果をもっぱら生産性の拡大と効率性の上昇に見る通説的な分業観は避けられるべきである (pp. 212~3)。

「分業のもっとも顕著な効果は、分業が分割された諸機能の能率を増大させるということではなく、それら諸機能を連带的にすることである。これらのすべてのばあいにおける分業の役割は、単に現存の社会を美しくし改善することであるばかりでなく、社会（連带的諸機能なくしては社会は存在しない）を可能にすることでもある。」(p. 24)

分業についての通説的理解は、個人の幸福願望と経済発展信仰に支えられたものである。労働の分割につれて労働の生産性が高まっていくことはよく知られている。人間は生産品をより多く所有すればするほど幸福になるとされ、だから分業はますます拡大していくべきものと考えられている。「科学はより良くより急速におこなわれ、芸術作品はますます数多くより洗練され、産業はより多く生産しその生産物はますます完全になる」というわけだ。こうして幸福欲求は、個人をますます専門化の方向に促していく。他方、もちろん、「分業は社会なくしては不可能である」。専門化した個人は、多数の諸個人の存在と協力を前提としているからである。だから分業の発展とともに、一方で諸個人の独立化がますます推奨されるとともに、同時に他方では「社会」がますます「協同の欲求 besoin de la coopération」としてその必要性が声高に叫ばれる、という分裂症的な現象が広く見られるようになるのである (p. 212)。

このような分業についての古典的な説明が、経済学においてはしばしばなされてきた。そこには、分業とともに潜在的に生成している「社会」が欠落していると言わねばならない。原理はもっぱら諸個人の心理的な幸福願望にのみ求められ、分業の発展を説明するためには諸社会の構造を観察する必要はないと考えられているからである。社会は、分業の原因というよりも分業を実現する手段、分業の結果でしかないと見られている。こうして、「社会が形成されるの

は労働が分割されうるからであって、労働が社会的理由から分割されるからではない」という言説が、ごく自然に流通し受けとめられていくのである (p. 212)。

だがこのような把握は転倒的と言わねばならない。分業を可能にするものは、諸個人の専門化だけではない。確かに「機能的差異 *différences fonctionnelles*」は分業の条件であり、専門化は人々の「自然的差異」によって印づけられる方向に沿って生じるであろう。しかし、「活動の専門化がそこから結果するためには、これらの差異が発展し組織されることが必要である。そしてこの発展は、明らかに外的諸条件の多様性とは別の諸原因に依存している」。機能的差異を組織する諸手段なしに、活動の専門化は確保されえない。そして、「手段はわれわれがそれを欲求するとき、はじめてわれわれにとって価値あるものとなる」のだから、諸個人の差異を組織する欲求の先在性が不可欠の前提であるはずだ。分業は諸個人の専門化を発展させるとともに、専門化を組織する社会的欲求をも発展させるのである。デュルケムは「分業」の概念を、諸個人の個性を専門化させる原動力という位相において把握したのである (pp. 246~8)。

この視角からは、「贈与 *donation*」もまた広い意味での「交換」に見えてくるだろう (p. 93)。契約当事者の一方だけが束縛されるいわゆる「無償契約」は正規の契約とは言えず、だから見返りを求めない「贈与」もまた経済的な交換行為とは認められてこなかった。だが、「交換は2つの存在が互いに不完全であるがゆえに互いに相互的に依存することを前提としており、交換はこの相互的依存を外的に表すものにすぎない」(p. 25)という視座からすれば、「贈与」は、「相互的義務のない交換」「真に協同的な契約の一変種」(p. 93)。ということになるだろう。相互性は協同に、協同は分業の進展に依存するのだから、「贈与」は分業のより高い発展段階に照応する経済行為と捉えることさえも可能である。逆に、普通の経済的な「交換」の方が、「単純なあるいは初等度の分業」に見えてくるのではないか (p. 93)<sup>51</sup>。

経済的分業は社会の表層に生じるものであって、必ずしも有機的社会の発展を表現するものでないことは、イギリスを見ればよく分かるだろう。イギリスでは、地方生活における伝統の権威といった環節類型がまだきわめて顕著であるにもかかわらず、経済的分業がきわめて発展している。これこそ、「社会構造が目立つほどに変化しなくても、何らかの事情が、ある民族に物質的福祉のより活発な欲望を刺激するだけで経済的分業は発展する」のであり、「社会の物質的密度は道徳的密度の状態を正確には表さない」ことの証明ではないだろうか。あるいはまた、経済的發展という「皮相的現象」は、その成功に必要な理知は教育のような外的諸影響によって容易に創り出されうるものであり、このような「模倣や模写」にすぎない文明は「劣等種族の社会構造を隠蔽する」、と言うべきか。当時のイギリスに対するデュルケムの態度はきわめて辛辣である (pp. 266~7)。

確かに、もし経済学者のように、分業を私的労働を交換する私的諸個人の特殊的結合の結果と考えるならば、分業それ自体からは何らの規制も産まれてはこないだろう。だが分業は、単に諸個人の過去も未来もない束の間の結合ではない。分業は、反復され習慣となるにつれて、

有機的連帯を固定化する連鎖網や緩慢な凝固作用をも生み出していく。そこで繰り広げられる相互的反動は、やがて固定性と規則性に到達し、慣習が力を得るに従って行為規則へと変化し、権利義務の出発点が据えられるようになる。つまり、分業は社会生活の一般的なそして恒常的な諸条件に結びついた諸機能であり、諸規則は諸機能としての分業の間で結ばれる諸関係なのである。諸規則は、諸器官の連帯的で相互依存的な状態を創造するのではなく、それを表明するものである。それはちょうど、神経系統が有機体の進化を支配するのではなく、この進化から結果するのと同様である (pp. 357~8)。

「神経網は、恐らくさまざまな諸器官の間で交換される運動と刺激の波動が辿る通路にすぎない。この通路は、生命が常に同一方向に流れながら、自ら穿った水路なのである。そして諸神経節は、多数のこれら諸通路の交差点にすぎないであろう。」 (p. 358)

この引用はスペンサーからの一節である。「規制」は、内的に生成している「連帯」の単なる表明であり、政府（神経網）は「連絡通路」というイメージで語られている。このスペンサーのイメージは“支配の次元”への問題関心を欠落させてはいるが、諸器官が十分に接触するときに認められる「相互の間隙にお互いを引き入れ合う」力学と相互依存の持続的感情が時を経て完成させる凝集化を語っており、デュルケムはここでは、反復され継続される人間的交通そのものが醸成させる社会的連帯の側面を強調する文言として肯定的に採録するのである (p. 360~1)。

「連帯的諸器官は隣接しているから、お互いにもっている欲求を事情ごとに容易に知らせ、したがってその相互依存については鋭敏な持続的な感情をもつ。同じ理由から、交換がそれらの間で容易におこなわれ、その交換はまた頻繁に規則的におこなわれるから、やがて自ら規則化し、そして時が凝集化の作業を少しずつ完成していく。最後には、ごくわずかな反動でも双方に感じられうるから、このようにして形成される諸規則はこの敏感な反応という刻印を帯びる。すなわち、諸規則は、詳細にわたって均衡の諸条件を予測し確定する。だが、もしこれと反対に何らかの不透明な環境が諸器官の間に介在すれば、ある器官から他の器官へと伝えられうるものは、もはやある一定程度の強度の刺激でしかないのである。相互間の関係は希薄となり、確定されるにいたるほどには反復されない。」 (p. 360)

分業を単に経済的にでなく社会的連帯の源泉と見る以上のような視角から、デュルケムは将来社会のヴィジョンを次のようなものとして描き出す。すなわち、分業が「外的拘束」によってでなく「純粹に内的な自発性によって確立されるばあい」には、「個人的諸性質と社会的機能の調和」が生じ、競争者たちは適材適所に赴くことになる。「労働が分割される様式を決定する唯一の原因は能力の多様性」であり、「労働の配分は事物の力によって能力本位におこなわれ」、「人間はその天性を完成することに幸福を見だし、彼の欲望は彼の手段と結びついている」からである (p. 369)。このような有機的社会への進展において、競争条件の外的不平等の漸次的凋落が認められるであろう。「分業は、ただそれが自発的であってはじめて、そして自発的で

あるかぎりにおいてのみ、連帯を生むものである」からであり、「自発性」は諸個人が一定の機能にきぎ付けされたり排除されたりしないことを前提するからである。「労働は、社会的不平等が自然的不平等を正確に表すように社会が構成されてはじめて、自発的に分割される」だろう (p. 370)。「組織化された社会においては、分業が、私たちが定義する自発性の理想にますます接近していくことは不可避である」(p. 374)。

## 5. 分業社会が与えるヴィジョン

だが、このような完全な自発性にもとづく社会はまだどこにも実現していない、とデュルケムは言う。カスト制度と富の世襲はひろく見られる。それらは、当人の個人的価値とは必ずしも対応していない諸利益を特定の人々だけに与え続けている (p. 372)。しかし、もし誰かがエネルギーの補充を他の何らかの源泉から受け取るとすれば、これらの外的不平等は「社会的価値」の均衡点を移動させ、「交換の道徳的諸条件をねじ曲げる」だろう (p. 378)。

「ある一定の社会においては、各交換物は各瞬間に社会的価値と呼ばれうる一定の価値をもっている。……平均的価値は、異常の諸要因の影響下でのみこの点から遠ざかる。そしてこのばあいには、公共意識は一般的にこの遠ざかりについて、多かれ少なかれ敏感となる。公共意識は、物の価格が物の要した努力と物の与える奉仕と無関係であるあらゆる交換を、不公正とするのである。」(p. 376)

確かに、「自発性が混合物なしに全うされている社会は存在しない」だろう (p. 371)。有機的連帯の社会類型は、機械的連帯の社会類型にいきなり取って代わるわけではないからである。前者は、後者が消滅していく程度に応じて発展していくことができるにすぎない (p. 158)。「高級諸社会は同一類型の低級諸社会の連合から生ずる」他ないのであり、「協同 *coopération*」の原理と単純な「結合 *association*」の原理が並走する「二元性 *dualité*」はひろく確認されるところである (pp. 262~3)。こうして現にあるカストや財産世襲が、相反する2つの原理のせめぎあいの“場”として再設定されることになる。

「新しい組織が出現しはじめるとき、この組織は既存の組織を利用しこれと同化しようとする。その際、諸機能が分割される様式は、既存の社会が分割されている方式をできるだけ忠実に模写しようとするものである。諸環節、あるいは少なくとも特殊の親和力によって結合された諸環節の諸集団が、諸器官となる。……階級とカストは、先在していた家族的組織と新たに生まれた職業的組織との混合から生じたものである。」(p. 158)

だが、「これらの混合的編成は長い間継続することはできない」だろう。両者の間には、「いつかは必ず爆発するようになる敵対関係が存在している。分業はこれを窮屈に閉じ込めている「融通のきかない鋳型」から解放され、これに逆らう「旧構造」の消滅によってはじめて発展することができるだろう (pp. 158~9)。機械的連帯から有機的連帯への移行について、デュル



ケムの叙述スタイルはなかなか革命的である。

分業社会への以上のような将来ヴィジョンは、社会プロセスについての一見すると正反対の実践態度を提案させることになる。すなわちデュルケムは、一方では、職業において諸個人が徹底的に「個人」に徹すべきことを説くとともに、他方では、社会的平等の枠組み遵守のためには公的権力の発動さえ「正義」として躊躇しない、という態度を取るのである。この“私”と“公”の同時表出についてのデュルケムの叙述を次に見ることにしよう。

### 1) 専門的職業に自己限定する諸個人

デュルケムは、分業の進展に伴ってますます地域性は消失していくと言う。「フランス人をイギリス人やドイツ人から区別している差異は、昔より現在の方が少ないのではないだろうか」。今日、ヨーロッパの諸国において法律・道徳・慣習・政治制度はほとんど近似している。

「ノルマンディー人は昔ほどガスコーニュ人と異なっていない」。地方ごとの人間類型は混合しあい、地域性は消滅する傾向にある。だが、社会を構成する個人のレベルでは違う。フランス人とイギリス人の差異は小さくなったとはいえ、このことは、「フランス人相互が、かつてのフランス人に比べてはるかに今日では異なっていることを、少しも妨げるものではない」。

「全フランス人が全体として表示している多様性は、依然として増大している」(pp. 106~7)。今日では、地域性の衰退に並行して個人性の増大が認められるのである。そしてそのことは「領域的環境 milieu territorial」に取って代わる「新しい枠組み cadre nouveau」である「職業的環境 milieu professionnel」の生成でもある、とデュルケムは見ている (p. 166)。

「職業的環境は、家族的環境と一致しないと同様に、領域的環境とも一致しない。職業的環境は、他の環境にとって代わる新しい枠組みである。そしてまたこの代替は、その他の諸環境が消滅する範囲内でのみ可能となるのである。」(p. 166)

分散と凝集の相反するモメントを含む機械的連帯から有機的連帯への推移過程は、新たな職業的連帯にもとづく社会を創生する。この職業的社会においては各人は自分の職業に専念すべきだ、とデュルケムは言う。デュルケムが嫌うのは、自らの持ち場に没頭することを拒否し、全体を鳥瞰するだけの「ディレクタント」である。確かに社会的分業の進展とともに労働は細分化され、諸職業間の分断も認められる。分業による単調性が科学や芸術の分野にさえ進行しつつあることへの慨嘆は J. B. セイによっても指摘された通りである (p. 6)。だがこのような分断は何らかの「普遍的労働」によって補われるべきものではなく、諸個人がそれぞれの職業に徹底的に自己限定することを通じてのみ克服することができる、とデュルケムは考えている。

これは、学問の細分化と研究者の蛸壺化・学問の没社会性、それにともなう「道徳的」な退行と“学問の危機”を嘆き、諸学問の統一性を再建する「新しい科学」の必要を説いたコントの見解とは対峙するものである。すなわちコントは、小刀の柄や留針の頭をつくることに一生

の間専心している「物質的世界」の労働者だけでなく、今日では方程式を解いたり昆虫を分類したりする「知的世界」においても細分化は進行しており、「道徳的結果は非常によく似ている」(p. 364)。したがって、「自然哲学のどの個別的分野の専門的研究にも没頭することなく、現状におけるさまざまな実証諸科学を考察するに際してはそれらの各々の精神を精確に決定し、それらの関係と連鎖とを発見し、できることならば、それらの固有な原則のすべてをより少数の共通原則に要約することに、もっぱら専心する」ような「知者たちの新しい階級 *classe nouvelle de savants*」の必要性を力説するのである (p. 350)。

確かに、ライプニッツやニュートンが天文学者であるとともに物理学者・数学者・哲学者・博物学者でもあったように、18世紀までの科学者は諸学の巨人であることが多かった。これと比較して19世紀の学者の研究分野は、諸問題の一分野あるいは一問題に限られていてほとんど他分野とは没交渉であり、各自の特殊科学は絶対的価値を有していて、それが何に役立ち、どの方向に向かっているかに心をくだく者など微々たるものであり、科学の統一性について気にかける者などほとんどいない。これが現状なのである (p. 347)。

だがデュルケムは、分業による学問の分断化を一般的研究部門によって克服すべきだとするコントの主張には反対である。全体を見失いがちな微細事の研究に対して一種の「哲学」の必要性を説くこの議論は、分散化へと向かう諸個人に対して「政府」の必要性を説く議論にどこか似ている。「哲学」にせよ「政府」にせよ、諸部分の新しい機能的発展に対して、統一性を言わば外在的に設定しようとすることは、はたして有効なのだろうか。一般性に向かったの外的な調整は、同質性と類似性によって特徴づけられる環節的社会にこそ照応するものではないのか。

またデュルケムは、今日の労働の複雑さそのものについても、次のように読み取る。「一頁の印刷の版組をする印刷所の監督、脈絡のない多数の定理を組み合わせて新しい一つの定理をひき出す数学者、あるいは気づきにくいほんの微候から直ちに病気を洞察し同時にその経過をも予見する医師のうちに、どれほど観念や心象や習慣の驚くべき組合せ集合が見られることであろうか」(p. 298)。科学もまた、多数の言語や通信を駆使して問題を解決するようになってきているのであり、その専門的知識は夥しい周辺知識の「組合せ集合 *assemblage*」から成り、したがって一定の専門領域に没入することは自ずと他の諸学に通ずる扉を開くことにもなりつつあるのである (p. 298)。

ここから見れば、「単なる思考力によって世界を説明しようと企図する古代の哲学者や賢人」(p. 299) は、単なる「好事家 *dilettante*」に見えてくるだろう。彼らは、「多数の趣味とさまざまな資質をもっているように見える」が、「少し違った衣裳であらゆる役割を演じているのは同じ役者である。知ったかぶりの夥しい色彩で輝いているこの表面の下には哀れむべき単調さが隠されている」(p. 299)。そして、哲学はますます「科学の統一」を確保することが困難になっていき、「総合 *synthèses*」はもはやほとんど「早熟な概括」以外のものではありえなくなるだ

ろう (p. 353). 一般的な教養を追い求めて職業的組織の網の目に専心することを拒む人々は、社会から逃れたディレッタントでしかないのではなからうか (p. 397).

だからデュルケムは、社会的分業を構成する諸個人が専門的職業に徹すべきことを主張する。分業はそれ自体のうちに他分野との接触や活動の方向についての見通しをもっているからであり、有機的社会においては、統一性は社会の中にすでに埋め込まれているからである。「統治器官 *organe gouvernemental*」は分業とともに発展・生成するのである (p. 350). 諸個人が、隣接分野とその変化に接触することの必要性に日々気づかせられるからである。分業は、経済学者が言うように社会的諸力の効率を増大する手段なのではなく、何よりもまず「連帯の源泉 *source de solidarité*」なのである (p. 365). 一定の定職に献身している者は職業道德の義務によって常に「共通の連帯感」が呼び醒まされるように、「機能的多様性」は「道德的多様性」を招来するのである (p. 352). 「実証科学の圏内に入るべき最後の科学」である社会諸科学の分野での連帯は、確かに他の科学に比べて遅れている (p. 362). けれども今日では、法律学・心理学・人類学・経済学・統計学・言語学・歴史学が、「あらゆる方面で互いに浸透しあう」 (p. 359) のが見られる、とデュルケムは指摘する。

「ある科学について少しばかり正確な観念をもつためには、その科学を実践してみること、言わばそれを生きてみるものが、確かに必要である。実際、科学というものは、それが決定的に証明したいくつかの命題のうちにまったく収まってしまうようなものではないからである。この実際ので現実的な科学の傍らには、自らの一部を知らずなお探求している、具体的で生き生きしたもう一つの科学がある。すなわち、獲得された諸結果の傍らには、言葉では表現されえないほど曖昧な、しかしながら往々その学者の全生涯を支配してしまうほど強力な、希望・習慣・本能・欲求・予感が存在している。これらのすべてがなお科学に属するのである。というよりも、科学の最上、最大の部分でさえある。……そうでなければ、人は科学的生命の精神でなく、字句をもつことになるであろう。科学はそれぞれ、こう言ってよければ、学者の意識のうちに生きている一つの魂をもっているのである。」 (pp. 353~4)

デュルケムは、抽象的な一般を求めるのではなく、特殊に内在し切り特殊を具体的に生活することが「普遍性」を醸成させる、と主張しているのである。したがって、「あたかも人間の道德的基礎が普遍性からつくられるかのように論じている」 (p. 398), 今日教育論は改められるべきこととなる。「子供が限られた定職とはっきりした前途の見通しを愛するようにすることが必要である」 (p. 398). また、労働者たちに一般的教養を与えるべきだという主張も、本来専門性が有している普遍性を真正面からでなく迂回的に追求しているという理由で、的を外していると考えられる (p. 363). 「私たちは、自らの視野を限定し、一定の定職を選択し、専心してそれに従事しなければならないのである」 (p. 396).

職業に対するこの禁欲的とも言えるスタンスは、私たちの存在価値は存在それ自体からでなく、存在が果たす諸奉仕から引き出されるものであるべきだ (p. 396), という議論へと通じて

いくだろう。今日、諸機能が専門化するにつれて、同一能力が多数の職業に役立っているのが見られる。兵士に必要な勇気は、坑夫・飛行士・医師・技師にも必要であり、観察眼は小説家・劇作家・化学者・博物学者・社会学者を作りあげる (p. 308)。遺伝によって獲得されるものは少なくなり、個人によって獲得される部分が多くなる。財産や職業の世襲 (カスト制度) は不要となる (pp. 307~8)。そして専門的職業への専念は、「すべての職業にすべての市民が平等につきうるという原則」なしには一般化しえないだろうから、職業移動の自由と柔軟性は不可欠の条件と言えるだろう (p. 319)。こうして、組織的社会における平等的正義の必要性が主張されることになる。

## 2) 「正義」としての「平等」原則の貫徹

すでに述べたように、分業が内発的自発性によって確立されるならば、適材適所が実現し、個人的能力と社会的機能とが調和するであろう (p. 369)。しかしこのような理想的状態は、まだどこにも実現していない (p. 371)。市場の拡大と大工業の出現は、「産業的生活」にいまだに均衡をもたらししていない (p. 362)。そしてこの不均衡は、往々にして「外的諸条件の不平等がいまだに非常に大きいということに因由している」のであり、時が来れば解決するというものではない (p. 362)。現実の社会的分業は外的諸力の介入によって多かれ少なかれ古い社会の痕跡を引きずっており、その切除はある程度外的におこなわれねばならぬだろう。

経済学者は、「契約の自由」がありさえすれば自由な社会が実現するかのように考えているが、これでは不十分である。人は強制されて合意することもあり、「間接的暴力」もまた自由を抑圧するからである (p. 376)。契約は、表明された同意であるだけでは不十分で、「その契約が正しいことが必要である」 (p. 377)。諸個人のサービスの交換に際しては、「正確な相互性 *exacte réciprocité*」 (p. 380) が要求される。とはいえ、外的規制は不均衡の矯正でしかなく (p. 377)、外的な「公共意識 *conscience publique*」が主張する平等は外的諸条件の平等にしかかなりえないだろう (pp. 372~3)。あらゆる拘束の欠如が必須であり、そのための「公共意識」による社会的コントロールが必要となるだろう (pp. 379~380)。経済学者の誤解は、自由を人間の生来の属性と考えていることであり、彼らは自由そのものが規制の産物であり、社会的活動から結果するものであることを理解していない (p. 380)。彼らは、社会的活動がなすべきことは、「競合的な諸自由が相互に妨害しあわないように、それらの自由の外的な働きを規制することである」 (p. 380) と考えている。しかし、もし外的諸力による規制が「不平等」をもたらすのであれば、それは「自由の否定」であり、「社会的諸力」はこの外的な規制によって形成された「自然的秩序」を「顛倒」させねばなるまい。「社会」はこの地平において現れてくるものであり、「自由」は自然状態に固有な属性であるどころか、逆に、「自然に対する社会の征服」の過程で生成してくるものなのである (pp. 380~1)。

「自由は、人間が物を服従させるために、物からその偶然的・不合理的・無道徳的な性格を取り去るために、物の上に自らを高めるようになるにつれて、すなわち人間が一つの社会的存在となる程度において、漸進的に実現されうるにすぎない。なぜならば、人間がもう一つ別の世界を創造し、そこから自然を支配するようになってはじめて、人間は自然から脱却できるからである。その別の世界こそ、まさしく社会である。」(p. 381)

分業が「拘束的分業 *la division du travail contrainte*」(p. 370)にならぬよう、拘束の切除をめざして「正義」を実行することは必要であろう。今日、生まれながらの職業独占や財産独占は少しずつ消滅しつつある。「平等が市民たちの間で常により大きくなっており、そして平等がより大きくなっていることは正しいことだという、今日著しく普及している信念」(p. 372)は、社会が不平等縮減に向かって現実に努力していることを示すものである。

それは、外的不平等が有機的連帯を「危うくする」ことからとも言える。連帯が信念と感情との共同状態によって確保される未開社会では、外的不平等によって社会的凝集が脅かされることはない(p. 373)。これに対して文明社会では、「不公正はますます耐え難いもの」となり、不平等な立場に置かれれば「一切の価値を取り消すという傾向がますます大きくなっている」(p. 378)。つまり、各部分の連帯性を前提する組織的社会にとって、「平等」は諸機能相互を結合するための本質的要件であり、外的諸条件の水平化は不可欠なのである(P. 374)。裏返して言えば、分業には外的不平等除去への内在的本性があるということになるだろう(p. 374)。有機的連帯を弛緩させる不平等は、社会的連鎖をその「致命的部分」において損なうからである。こうして社会は、不平等除去の「正義の事業 *oeuvre de justice*」に向かうこととなる(pp. 373~4)。

「人間がもう一つ別の世界を創造し、そこから自然を支配するようになってはじめて、人間は自然から脱却できるからである。その別の世界こそ、まさしく社会である。それゆえ、もっとも進歩した社会の任務は、正義の事業であると言えよう。」(p. 381)

新社会の任務は、「不完全な正義」(p. 381)で満足することなく、分業を「限られた鋳型 *moules rigides*」に閉じ込めるこのような「敵対関係 *antagonisme*」(p. 158)の除去という「正義の事業」(p. 381)に向かうところにある。だがこの事業は、もちろん単なる公的権威の監視や規制の器官あるいは指導力だけによっておこなわれうるものではない。ある様式に従った「規制的活動」が必要なのである。

「知的で経験に富む首長が第一に配慮すべきことは、無用な雇用を廃し、各人が十分に専心しうるように労働を配分し、したがって各労働者の機能的活動を増大させることであろう。……各機能担当者が良く決められた仕事をもっているならば、そして彼がその仕事を正確に果たすならば、彼は必然的に隣接する諸機能担当者を必要とすることになるし、彼らと連帯していると感じないではいられない。」(pp. 383~4)

この視座から見れば、経済学者の分業論には不満が残る。彼らは、「社会生活 *la vie sociale*」は「外的で強制的な編成 *arrangements extérieures et imposés*」からではなく、「自由な内的彫



琢 libre élaboration interne」から結果することを示したという功績を有するが、「自由を人間の一つの構造的属性 attribut constitutif と考え、それ自体としての個人の概念から自由を論理的に演繹する」ために、「社会活動」は、自由な個人活動が妨害されることを防止するというだけの限定的な地位に押し込められてしまった (p. 380)。だから、経済学者は、市場は価格の騰落によって自ずと調和が回復されるとは言っても、市場に対する社会的規制が必要だとは決して言わないのである。この調和が、混乱と長期にわたる均衡の崩壊ののちに回復されるものであるとしても、彼らは「規制の欠如が諸機能の規則正しい調和を許さない」とは考えないのである (p. 358)。

「もし経済学者たちが、分業を社会的諸力の能率を増大させる手段にすぎないとしてしまわなかったならば、また、もし分業が何よりもまず連帯の源泉であることを認めていたならば、彼らは分業のこの本質的性格を世に埋もれたままにしておくことはなかったであろうし、したがってまた、分業をこの不当な非難にさらすようなこともなかったであろう。」 (p. 365)

現に存在する不平等な外的諸条件を前提してしまいかねない経済学者の“市場の自由”に対して、デュルケムは「社会」という新しい境位が要請する真の自由を強調するのである。すなわち、社会的コントロールによって「平等」が実現され、諸個人が専門的職業を介して連帯する「分業」社会を招来させようとしたのである。

### 3) デュルケムの夢

デュルケムは、社会が広大になり稠密になるにつれて「個人的多様性 deversités individuelles」が増大し、これまで意識外に置かれていた多くの事物が表象の対象となり、新しい型の「心的生活 vie psychique」が出現する、と言う (p. 339)。「個人の心的生活」は、「社会の心的生活」とともに「拡大し複雑化し柔軟になる」。文明人は、概念を形成し法則を定式化し、理念化の能力によって未来に侵入し、ますます広大な空間と時間を抱擁するようになる。未開人と文明人との違いは、自分自身をより高めようとするこの心以外のものではないのである (pp. 339～340)。

この文明人の心にとっての「幸福」は、もちろん功利主義的な尺度によって必ずしも測られるものではない。確かに、快樂が苦痛に優ることは生命が維持されるためには必要である。だが、この超過分が昔より今の方が大きくなっているわけでもない。「幸福は快の総体とは別のものであるように思われる」。生命がもつ根本的魅力は、快樂の一時性や局部性とは違い、持続性と遍在性に関連しているのではないのか。「呼吸作用と循環作用の活動のような持続的活動は、何ら積極的な享樂を与えるものではないが、われわれの快活さや活気が殊に依存しているものである」。快樂は幸福に依存し、幸福は持続的に反復される永続的素質に結びついているのである (p. 222)。

分業社会においては、視野をあちこちに広げるのではなく、一定の職業に自己限定しこれに専念すべしという前述した議論は、上に見た自己充足的な“幸福感”と密接に関連している。「より進歩した社会」における人間的行為は、社会の一器官としてその器官の役割を果たすことである (p. 399)。より広く分散的な活動の方が、より狭く集中的な活動よりも優れているとは、必ずしも言えないだろう。平凡な完全さよりも強度の高い専門的な生活を営むことの方に、「威厳 *dignité*」はより多く存在するものである (p. 398)。「自由」という言葉を抽象的に追い求めるのではなく、諸個人が「具体的経験的可変的人格」として生きることが重要である (p. 399)。私たちは、完璧に仕上げられた一種の「芸術作品 *oeuvre d'art*」として生きるのではない (p. 396)。人間の存在価値は存在そのものからひき出されるのではなく、彼が与えることができる用益からひき出されるものである。視野を限定し、責任ある仕事に従事することによって、諸個人ははじめて「個人」になるのである。

このような組織的社会の「道德」はあまりに「世俗的」である、と非難されるかも知れない。環節的社会的道德のように共同を強制する必要がなく、諸個人を超絶的目的の奴隷にするようなこともないからである。

「この道德はわれわれに、同胞に優しく接し、公正であり、よく仕事し、各人がそのもっともよく遂行しうる機能に就いて働き、その努力に対して正当な価格を受け取る、ということを要求するにすぎないのである。」 (p. 404)

このような理想は、理想としては確かにあまりにも身近である。だが、「理想はより超越的であるから高いのではなく、われわれにより広大な展望を与えるからより高いのである」 (p. 404)。肝心なことは、理想がわれわれの頭上高く飛翔することではなく、われわれの活動に対して充分長い道を開くことである。何よりも私たちは、上に述べた道德の実行がいかに困難であるかも知っている。道はまだ実現されようとしているところではないのである。

例えば「ヨーロッパ社会」を考えてみよう。戦争が国際関係の法となるのではなく、諸社会相互の関係が平和裡に規制されるような状態に向かって全人類が協力することが必要である。だが、地上に並存する諸社会類型の間にはあまりにも多くの知的道德的差異が存在するので、現在はこの理想が実現される間にさえ至っていない、と言わねばならない。国民国家を越える「唯一の人類社会 *société humaine*」の形成など、永久に不可能かも知れない。とはいえ、社会の拡大は諸機能のより大きな専門化なくしては均衡状態を維持しえず、容積の増大は密度の増加を伴うものである。分業によってより広大となっていく諸社会の形成は、私たちをこの目的に向かって近づけてはいないだろうか。夢としての「人類社会」は、すでに実現の過程にあり、この「ヨーロッパ社会」に私たち一人一人は連带的にコミットしつつあると語って、デュルケムはこの著作を終える (p. 402)。

「ヨーロッパ諸民族の上に、自発的運動によって一つのヨーロッパ社会は形成される傾向にあるし、そしてこの一つのヨーロッパ社会は今後何らかの自覚の感情をもち、組織化の端緒を

もつのである。」(p. 402)

## 6. 結びにかえて

デュルケムの『社会分業論』は、今日の私たちの目から見ると幾分古くさく感じられる面も確かにある。そこには、明らかに適切とは思えない定義も含まれている。「環節的社会」「有機的社会」の類型論は野蛮・文明の二項図式の再版に過ぎぬとも言えるだろうし、何よりも「未開社会」についての当時の理論的制約を感じさせられる。第2版の序文(1902年)で社会的無秩序克服に関してデュルケムが期待を寄せた「同業組合」を、今日の「労働組合」に置き移してみることはとてもできない。叙述の随所で見かける「愛」「奉仕」「慈善」「道德」「無私の精神」などの言葉はあまりにもセンチメンタルに響く。だがそれにもかかわらず、公刊後100年を経た同書が、今日なお生き生きとした促迫力をもって多くの読者に受けとめられていることもまた事実である。その魅力はどこにあり、デュルケムは今日どのような点で読まれうるのか、小稿を閉じるにあたって、最後にこの点について若干記しておくことにする。

まず第一に、デュルケムが設定する“社会空間”がきわめて現実味豊かだ、ということを手挙げておきたい。

デュルケムは、実に巧みに“社会空間”を設定している。「機械的連帯」から「有機的連帯」への移行を単なる「進歩」としてでなく「逆比例」も含む複雑な過程としてとらえ、そのため読者は、両連帯が交錯する本質的な“場”を「装置」として構造的にとらえるように巧みに誘導される。孤立した個人から出発するのではなく諸個人を結びつける社会的連帯を基層に置くことによって、経済的な「交換」は不完全な主体間の協同ととらえられ、一見「交換」とは見えない「無償契約」である「贈与」が「交換」のより高次の段階を示すものとして浮上させられさえする。現代そのものが「機械的連帯」から「有機的連帯」への転換期であるという把握によって、カストや財産世襲がまさに2つの原理のせめぎあいの“場”として問題設定させられることになる。要するに「社会」が、行為主体として生き生きと登場させられているのである。

それは単に、レトリックの巧妙さということではない。デュルケムがこのような「社会」を設定できたのは、分業を言わば“水平的”にだけでなく“垂直的”側面にも焦点を当てて肉薄したからではないだろうか。一般に分業は、“水平的”なものとして表象されることが多い。例えば工場内の諸作業や農村と都市を、私たちは分業の諸構成部分間の並列的關係として眺める。しかし、企業内分業が一つの企業意思によって統轄されているように、産業間・地域間・国家間においても、それらを統合し一つの集合力にまとめ上げていく“力”の次元は現存しているはずである。デュルケムは、社会的連帯という視座を提出することによって、このとかく看過されがちな、市場に先立ち社会的分業に潜む“垂直的”な次元の所在を照射したと言えるだろう。デュルケムの“平等論”が、単に「機会の平等」だけでなく「結果の平等」の貫徹を強調

したことは偶然ではない。今日のグローバリズムをめぐる議論において、まさに世界的なレベルでの「不平等」の是正が市民的に必要な不可欠の条件であることを想起させる点で、デュルケムの議論はきわめて今日的なものになっている<sup>6)</sup>。

第二に、デュルケムの経済学批判に関してである。

市場が不完全な連帯の様式に過ぎないという視座は、そのまま今日のセーフティ・ネットの議論につながるだろう<sup>7)</sup>。また、市場に前提される私的個人の「幸福」の一面性への指摘は、環境問題にも関わって、外破的社会に対するオルタナティブの議論にも通じていくだろう<sup>8)</sup>。また例えば経済学者のマーシャルが、「内部経済」の概念によって「資本に体化された技術進歩」を物象化してとらえたのに対して、デュルケムの視座があくまで人間的であることは、逆にその現代性を表すと言えるかも知れない<sup>9)</sup>。

だが、特に注目すべきは、今日の労働現場の変貌である。企業の終身雇用や年功序列は崩れ、労働者の企業に対する「忠誠心」はもはや無条件に前提できなくなっている。今までならば、現場に生じる不規則なトラブルは労働者の無意識の奉仕によって未然に防がれてきたが、今では紙屑一つ拾いあげるのも指示待ちの「仕事」となっている。職場は心理面で「不透明な環境」であり、労働現場にはモラル・ハザードが充満している。そして、例えばボランティア等、生きがい企業での仕事の外に見いだす人も増えてきた。他方、企業そのものの存在理由も動揺している。「企業の社会的責任」論は、様々な情報公開と利益の社会的還元を企業に要求している。企業はもはや私利利潤の追求者であるだけでは済まなくなっているのである。また「コーポレート・ガバナンス」論では「企業は誰のものか」が改めて問われ、株主だけでなくステイク・ホルダーとしての地域や社会一般にまで「所有」範囲を拡張する議論も現れてきている<sup>10)</sup>。情報社会化の中で「企業」の「バーチャル化」が進展し、「労働」現場の希薄化と融出が進行しているのである。そのような中で、「専門的職業」に専念する諸個人の連帯を説くデュルケムの分業論は、かえって鮮烈な輝きを放っていると思える<sup>11)</sup>。

第三に、デュルケムが説く「道徳」的な側面が、「内面の自由」に関わって今日的であることについてである。

自由には「……からの自由」と「……への自由」がある、とはしばしば言われる。それは、共同体から脱出した個人が再び共同性を回復するという、反対方向の2つの過程に照応して理解することができるだろう。しかし今日の「自由」は、このような「共同体」対「個人」という枠組ではもはやとらえ切れなくなっている。以前は「大人になる」とは「共同体」から自立することであったが、今日では逆に何らかの目標を指定する「社会」に自らを統合づけていくことが「大人になる」と考えられている。絶えず自己の限界まで努力しフロンティアを先へ先へと推し進める行動規範が全成員に対して強調されている社会。とにかく誰もが皆、多忙なのである。もちろん、この競争から降りる自由はある。しかしそれは社会からのドロップ・アウトを意味する。「社会」はかつての「共同体」のように、飛び出そうとする個人に帰還を呼

びかけたりはしない。以前は「個人」は言わば後ろ髪を引かれながら「共同体」から出発したもののだが、今では言わば腰のひけた格好で後退りしながら「社会」から落ちこぼれていくのである。誰も止めてはくれない。デュルケムが提出した「アノミー anomie」という概念は、そのような現代社会の中での諸個人が抱える緊張状態のプロト・タイプを示しているように読める<sup>12)</sup>。

情報化社会で問題なのは、コミュニケーション技術の発達で、一方で人々を均質化し中央集権的な通信ネットワークによるグローバルな統合をもたらすとともに、他方では文化的な多様化が際立たせられて、精神的・感覚的な帰属意識の分散化が進行することである。しかも一面では、このような差異は絶えず回収され、新たな差異が生み出され、諸個人は同質化の渦の中に巻き込まれて消費されていこうとする。「国家」への官僚的な一元的統合が強まり、この不断の上向運動から振り落とされた夥しい諸個人は、例えばメル友や同好会やカルトのような、たとえ一時的でも親密な結びつきを求め、こうして無数の小集団が簇生し社会現象として顕在化してくる<sup>13)</sup>。

しかし他面では、政治過程と文化過程の多元主義の傾向がますます強まり、深い内省を通じて文化の深層に達し相互理解を深める諸個人が生み出されてくる、とも考えられる。このような諸個人は、例えば何らかの不正義があればすぐにそのような組織を見限ってしまうから、したがって平等的正義が、社会的統合の不可欠の原則として盛んに喧伝されることになる。今日重要なことは、このような「平等」への要請が諸個人の「内面の自由」をいったんくぐり抜けて再び外に向かって強い言葉で語り出されていくことだろう。デュルケムが提出した「社会的連帯」という概念は、使い古された言葉ながら、改めてこの地点で今日的なメッセージ性をもって蘇ってくるように思われる。本稿は、そのような問題関心に触発されつつ、ひとまずデュルケムの『社会分業論』に内在し再読したものである。

## 注

1) 本稿では、Émile Durkheim, *De la division du travail social*, 1893, 5<sup>e</sup> édition, 1998 ([1]) をテキストとして用いる。同書からの引用に際しては、引用頁を (p. ×××) のように略記し、本文中に挿入して示すことにする。文中の傍点 (・) は原著者の、(° ° °) および [ ] は筆者のものであり、(／) は行替え、(……) は省略を、それぞれ示している。尚、訳出に際しては、井伊玄太郎訳 (1930～1年初訳) および田原音和訳を参考にした ([1])。

2) この点では、労働時間を「楽しい労働時間」

と「苦しい労働時間」に分け、享受者の「総効用」だけでなく「生活者の生産と消費」の両面での「人間の生活の最大幸福」という観点から、「主体的均衡モデル」を確立しようとした H. H. ゴッセン (1810～58 年) には、デュルケムとの問題の共有性が指摘できるだろう。安藤金男の一連の仕事 ([24] 3 頁, [25] 92 頁) を見よ。安藤はまた、デュルケムの「無機的結束」と「有機的結束」についても、「時間」概念の中での再定義を試みている ([26] 88 頁)。参照されたい。



- 3) 実はデュルケムは、「環節的社会 *sociétés segmentaires*」「有機的社会 *sociétés organiques*」という言葉をあまり用いてはいない(cf., p. 150, p. 169). この概念が集中している第一編第三章を通観しても、それらは、「環節的組織」(p. 152, p. 161, p. 163, p. 164, p. 169, p. 188), 「環節的と呼んでいる諸社会」(p. 168), 「環節的类型」(p. 168, p. 201), 「群体類型 *type colonial*」(p. 168), 「環節的構造」(p. 209)のように、また、「有機的連帯が優勢である社会」(p. 157), 「職業的組織」(p. 164, p. 167), 「有機的社会的類型」(p. 169), 「組織的类型」(p. 201)のように、多様な用いられ方をしている。「連帯」の様式が結晶させる「社会の型」について固定的なイメージが形成されることに、デュルケムはきわめて慎重だったことが窺われる。
- 4) 「機械的連帯」と「有機的連帯」のこのような「理念化」された叙述に対しては、多くの論者が批判している。例えば H. プレイヴァマンは、デュルケムが「工場内分業」を「社会的分業」に抽象化し、「私たちの時代に分業が発展させる独自の社会的諸条件を断固として回避している」と批難し、労働現場の苛烈さとそこでの「労働の衰退」を直視する必要性を強調している ([12] p. 74)。
- 5) デュルケムとその甥である M. モースとの関わりについては、N. J. アレン「人格というカテゴリー」([20])、および田原音和 ([19]) を参照せよ。
- 6) グローバリズムにおける“支配の次元”を強調する著書は多い。さしあたりここでは、J. ジグレル ([27])、D. コーテン ([28]) を挙げておこう。また反対に、グローバリズムをアメリカニズムとは区別しつつも、その宿命的必然性を主張した L. C. サロー ([29]) も興味深い。
- 7) セーフティ・ネット論については、金子勝 ([30] [31]) を参照のこと。
- 8) C. ハミルトン ([32])。
- 9) A. マーシャルにおける「技術革新の内生化」については、村上泰亮が興味深い ([33] (下) 55 頁, 68~79 頁)。
- 10) 『中小企業白書』は 1999 年版で、「中小企業の企業統治と企業行動・経営成果」と題する一章を設け、株主・市場・関連企業との連関における「コーポレート・ガバナンス」の態様分析を包括的におこなっている ([34] 130~185 頁)。
- 11) 物余り社会の中で労働が「芸術化」する可能性をいち早く見据え、専門的美的に緩やかに連合した平等社会を遠望した、デュルケムと同時代の W. モリス『ユートピア便り』([35]) も想起しておこう。
- 12) 宮島喬は、デュルケムの「アノミー」概念について、R. マーソンの「現代アメリカ社会の社会的規範」論 ([3] pp. 146~8) を紹介しながら、「欲求の対象をたえず更新し、その限界をたえず上向的に拡大していくという極度に動的な行動様式を善とするあらたな規範意識の一般化」と結びつけた解釈を試みている ([15] 232 頁, 240 頁)。尚、「アノミー」という概念は本格的には『自殺論』(1897 年)で展開されており、『社会分業論』では散見するにとどまっている (cf. p. 360, p. 405, p. II)。
- 13) 中西寛は、M. マクルーハンをも援用しつつ、「活字によるコミュニケーションは共感の代わりに読み手の創造力を喚起する」が、「現代の電気メディアによるコミュニケーション技術は、そもそも共感もちうるような相対的に小さな集団内で自己確認を強める傾向をもつようである」ことを強調し、「合理性に解消されない人間の感覚や情操といった魂に訴える価値や客観的には非合理に見える価値にすら帰属感を求める心理が出てくる」社会状況に、デュルケムの「アノミー (価値喪失)」概念を積極的に読み込もうとしている ([36] 251~4 頁)。

## 参考文献

[1] Durkheim, É., *De la division du travail social*, 1893, 5<sup>e</sup> édition, Quadrige/ PUF, 1998 (井

伊玄太郎訳, 講談社, 1989 年; 田原音和訳, 青木書店, 1971 年)。

- [2] Alpert, H., *Emile Durkheim and His Sociology*, Columbia University Press, New York, 1939(花田・仲・由木訳『デュルケームと社会学』慶応通信, 1977年).
- [3] Merton, R. K., *Social Theory and Social Structure*, 1949, revised ed., The Free Press, New York, 1967(森他訳, みすず書房, 1961年).
- [4] LaCapra, D., *Emile Durkheim, Sociologist and Philosopher*, The University of Chicago Press, Chicago and London, 1972.
- [5] Lukes, S., *Emile Durkheim, His Life and Work: A Historical and Critical Study*, Penguin Books, 1973.
- [6] Bellah, R. N., *Emile Durkheim, On Morality and Society*, University of Chicago, 1973.
- [7] R. A. Nisbel, *The Sociology of Emile Durkheim*, Heinemann, London, 1975.
- [8] Thompson, K., *Emile Durkheim*, Ellis Horwood Limited, 1982.
- [9] Cladis, M. S., *A Communitarian Defense of Liberalism, Emile Durkheim and Contemporary Social Theory*, Stanford University Press, California, 1992.
- [10] Parkin, F., *Durkheim*, Oxford University Press, 1992.
- [11] Jones, R. A., *The Development of Durkheim's Social Realism*, Cambridge University Press, 1999.
- [12] Braverman, H., *Labor and Monopoly Capital, The Degradation of Work in the Twentieth Century*, New York, 1974(富沢賢治訳, 岩波書店, 1978年).
- [13] 新堀通也『デュルケーム研究』(文化評論出版社, 1966年).
- [14] 新明正道『総合社会学の構想』(恒星社厚生閣, 1969年).
- [15] 宮島喬『デュルケーム社会理論の研究』(東京大学出版会, 1977年).
- [16] 佐々木交賢『デュルケーム社会学研究』(恒星社厚生閣, 1978年).
- [17] 中久郎『デュルケームの社会理論』(創文社, 1979年).
- [18] 折原浩『デュルケームとウェーバー』(三一書房, 1981年).
- [19] 田原音和『歴史のなかの社会学』(木鐸社, 1983年).
- [20] N. J. アレン「人格というカテゴリー」(M. カリザス・S. コリンス・S. ルークス編『人というカテゴリー』(厚東・中島・中村訳, 紀伊國屋書店, 1995年)所収).
- [21] 佐藤慶幸『デュルケームとウェーバーの現在』(早稲田大学出版部, 1998年).
- [22] 中島道男『エミール・デュルケーム』(東信堂, 2001年).
- [23] 内田隆三『社会学を学ぶ』(ちくま新書, 2005年).
- [24] 安藤金男「ゴッセン経済学における労働把握について」(『オイコノミカ』第24巻第3・4合併号, 1988年).
- [25] 安藤金男「ゴッセン経済学の政策的課題」(『経済科学』第35巻第4号, 1988年).
- [26] 安藤金男「経済学説における時間把握の差異について(1)」(『オイコノミカ』第38巻第3・4合併号, 2002年).
- [27] J. ジグレル『私物化される世界 (*Der Welt und ihre globalen Widersacher*, 2002)』(渡辺一男訳, 阪急コミュニケーションズ, 2004年).
- [28] D. コーテン『グローバル経済という怪物 (*When Corporations Rule the World*, 1995)』(西川潤監訳, シュプリング・フェアラーク, 1997年).
- [29] L. C. サロー『知識資本主義 (*Fortune favors the Bold*, 2003)』(三上義一訳, ダイアモンド社, 2004年).
- [30] 金子勝『セーフティ・ネットの政治経済学』(ちくま新書, 1999年).
- [31] 金子勝『市場』(岩波書店, 1999年).
- [32] C. ハミルトン『経済成長神話からの脱却 (*Growth Fetish*, 2004)』(嶋田洋一訳, アスペクト, 2004年).
- [33] 村上泰亮『反古典の政治経済学』上・下(中央公論社, 1992年).
- [34] 中小企業庁編『平成11年版中小企業白書』(大蔵省印刷局, 1999年).
- [35] W. モリス『ユートピア便り』(五島茂・飯塚一郎訳, 中央公論社, 2004年).
- [36] 中西寛『国際政治とは何か』(中公新書, 2003年).

(2005年10月27日受領)